

授業マネジメントの勘どころ： 「空気の教育」を目指す

田邊 祐司 Tanabe Yuji (専修大学)

授業を円滑に進めるための「勘どころ」を3名のベテラン教師からお裾分けいただき、まとめてきましたが、それも今回で終了と相成りました。最終回ということで、これだけは若い先生方に伝えたいという「メッセージ」を各自に語ってもらい、本コラムのまとめとさせていただきます。

A 先生：私は「英語のプロたれ！」というメッセージを贈りたいと思います。私の「遺言」でもありません(笑)。状況は人によってまちまちですが、これまで新人教育にかかわってきた経験から申しますと、大体3年目くらいから目が回るような忙しさに飲み込まれます。そうこうしているうちに、肝心の英語やその指導に磨きをかける時間がなくなるというのはよくあるパターンです。

といっても、最初はそれまでの「貯金」がありますから、何とか“making both ends meet”でやれましょう。しかしながら仕事量が増すにつれて、英語力の「貯金が底をつく」感じが、やがては訪れると思います。

指導法も同様です。中学校の場合、言語材料に限られるのでルーティーンは作りやすく、一見スムーズな授業マネジメントができていような錯覚にとらわれます。しかし十年一日のごとく、同じ手法で対応できるわけがありません。工夫やチャレンジのないまま、「いつもの繰り返し」を続ければ、この面でも「破綻」が訪れることはこれまた自明です。

本欄では、われわれの勘どころを開陳してきましたが、それすら時代の流れの中で修正を加えるべきものがないとは言いきれません。生徒も毎年のように違うタイプの連中が入ってきます。

プロはそんな現実を踏まえるべきです。それがブ

ロのプロたる所以ではないでしょうか。日々の流れの中でその根本を忘れることがあります。しかし、いわゆる“one of those teachers”にはなっほしくないのです。そのためには、常に英語力を磨き、新たな知見を取り入れ、指導に工夫を加えていく必要があるのです。

C 先生：A先生、まさにその通りです。流れに身をゆだね、“one of those English teachers”になっていった新人を私も数多く見てきました。

A先生のメッセージと少しかぶりませんが、私からは“Be a good role model.”というメッセージをお伝えしたいと思います。「先生」ということばの由来はいろいろあるようですが、生徒にとっては読んで字のごとく、人生の、そして学習の“role model”でもあるはず。

教師にとって、“role model”であり続けるというのはとても大切なことです。発音、語彙・表現、文法という英語を形成する骨格部分の知識は言うに及ばず、それらを元にした4技能においても「先を行く人」でないといけません。

若い頃、初めて教室にやって来たALTと私がどのように会話をするかを喰い入るように見つめていた生徒の「熱視線」を忘れません。あのとき生徒は私をsize upしていたのです。

教職を選んだ以上は、プロがプロとして認められてからも、トレーニングの手を緩めることがないように、常にプロ教師は範を示すことをずっと求められるのです。教師自身が学ぶのを止めた瞬間、その人はプロではなくなってしまいます。その信念と姿勢を続けることにこそ、授業マネジメントを成功させる最大の鍵があると思います。

B 先生：お二人のメッセージは英語教師本質論にかかわるものですね。私もどちらかというところ、そうした本質論に近いのですが、授業にも直接かかわるメッセージです。それは、田邊先生がよく言われる「センサーを on にする」ということです。

自戒の念を込めて申しますと、われわれは忙しくなると、生徒のちょっとしたしぐさや動きに対して鈍感になるといいますか、見逃しをしでかしてしまうことがあります。

しかしながら、管理職の立場から新人の先生方を見ておると、忙しいとかどうかという仕事上の状況以前の問題として、「センサー」という人間の感覚の使い方にすこぶる未熟な新人が増えているような感じがしております。昨今の教員採用試験は、我々の時代とは打って変わって難易度が高くなり、確かにオーラル面を含み、学力面ではすぐれた方々が採用されています。これは頭の痛い発見でもあります。

C 先生：確かに……。私にも思い当たることがあります。「江戸しぐさ」のひとつの「傘かしげ」の話を思い出しました。傘をさした人とすれ違う場合、これではぶつかるなと思ってさりげなく自分の傘を傾けて、通行を円滑にするというあの感覚、これも「センサー」でしょうか。

B 先生：そうそう、それです。相手の心情を察すること。最近では「江戸しぐさ」が道徳の副読本にも採用され、歴史的な根拠に賛否両論があるようですが、それでもお互いを「察し合う」行為は、ある意味、日本文化の「エートス（気風、精神）」にもつながっていると思います。

A 先生：企業が大学の卒業生に一番求めている能力であるコミュニケーション能力というのはそのあたりのことを内包しているのかもしれませんが。「昭和人間」の価値観は古いのですが、昨年入って来た新人の中にも、情報機器は私が恐れ入るほど驚く速さでこなすのですが、人の情を慮おもんばかるというヒューマンインターフェイスの面では、傘どころか首をかしげるような場面（笑）に遭遇します。

B 先生：英語をやればやるほど、自国文化の価値に目覚め、文化の根底にあるものを re-appreciate する（その価値、重要性に目覚める）ようになるはずで、英語を通してそういう方向へといざなうためには、英語教師自らが「察する文化」の核心部分を体現しうる“role model”になってほしいのです。

C 先生：そうですね。クラスルーム・マネジメントがうまくいくかどうかはそんな教師自身のセンサーの感度にも関係すると思いますよ。

田邊：みなさんの「最後の遺言」をお聞きしながら（笑）、あるエッセイのことを思い出しました。それが『英語青年』（研究者）の編集長も務められた外山滋比古先生（お茶の水大学名誉教授）の「空気の教育」というエッセイです。そこには次のような一文があります：

教育のことを薫陶という。これはまさに空気による育成を意味する、家庭には家風、学校には校風があることを考えてみよう。人間が生活しているところにはやがて、一定の空気、雰囲気が生じる。本当の教育は押し付けや口先だけの注意ではない、子どもを包む家庭や学校の空気こそ、最も深いところに作用する。

これは学校や家庭、全体に漂う空気、雰囲気のことか書いてありますが、この空気は人にもあてはまると思います。お三人ともそれぞれが独自の空気を醸し出され、それはやがて教室全体を包み、生徒たちの大切な糧になって来たことがよくわかります。授業マネジメントはそんな教師の指導技術や勤どころと相まって形成されるのでしょうか。

若手の先生方、環境に負けないように、ずっと英語を好きでいてください。そして、学び続けてください。英語が大好きで、自らも学び続ける先生がいる限り、空気の教育は続きます。

お三方、長い間、お付き合いいただき、大変ありがとうございました。

【参考文献】外山滋比古（2011）『空気の教育』筑摩書房。